

令和4年度 第3回長野市行政改革推進審議会 議事録（概要）

日 時：令和4年8月2日（火）午後2時から午後3時30分まで

場 所：長野市役所第一庁舎7階 第1・第2委員会室（Web会議）

出席者：委 員「会議室」 普世会長、寺澤委員

「Web」 阿部副会長、宇賀田委員、小池委員、中谷委員、  
真野委員、山平委員

事務局 池田総務部長

〈総務課〉 返町課長、山口主幹、鈴木係長

≪資料≫

資 料 1 長野市のこれまでの行政評価の取組

参考資料 1 長野市事務事業評価シート

1 開 会

2 会長あいさつ

3 議 事

行政評価の今後の方向性について

（事務局）

資料1、参考資料1について説明

（真野委員）

行政評価の考え方、仕組み等について説明

（質疑応答）

（普世会長）（資料1 P2）平成16年度から本格実施した事前評価は、財政課の予算査定と重複することから平成18年度をもって廃止したということであったが、最近は新年度に予定されている新規拡大事業のヒアリングを行っているという。このヒアリングと当時の事前評価とは同じものか。

（事務局）現在、8月に新年度事業のヒアリングを行っているが、評価という手法ではなく、事業の内容や費用等の予定を市長や理事者に説明するものであるため、当時の事前評価とは別のものである。また、事後評価では予算編成に間に合わなかったことから、事前評価を導入して予算編成に合わせたスケジュールで行っていたが、職員には（事後と事前評価で）同じような評価シートを作成するイメージがあり、事前評価は平成18年度でやめることにしたものの。

(真野委員) 役所の場合、基本的には事務事業の単位で新しい事業を提案することが多いと思う。でも実際には、その事務事業そのものは政策を実現するために実施している1つの事業であり、政策実現のために実施しているすべての事業の中で、うまく機能している事業、機能していない事業を明確にしたうえで、更にこういう事業を行いたいという説明になっているかが大切である。そのためには、ロジックモデルのようなものを組み立てていなければ、ただ単に1つの事務事業だけ見て予算を使うか使わないかという議論になってしまう。

(寺澤委員) 長野市の事務事業評価シートについては、これまで見てきているので、どの場面で、どのように使っているか大体把握しているが、塩尻市や長野県では、どのようなところで使っているか。

(事務局) 基本的には、まとめているだけのものではないかと思われる。県のシートは右上に点検とあり、こういう事業を行っているということを公開していくタイミングで作成しているとわかる。また、塩尻市については、部局ごとに予算配分されている中で、見直しを行うという趣旨に使っているというところまでは承知しているが、具体的なことは把握していない。

(寺澤委員) 塩尻市は不明だが、長野県では(議会の)決算特別委員会での説明資料としていたと思う。自治体の最終的な意思決定はどこでするかを考えたとき、議会だと考える。その議会に対して、長野市では事務事業評価結果をどのように説明しているのか。

(事務局) 長野市では、議会に対して事務事業評価結果の説明はしていない。

(真野委員) 職員は、自分たちが現場で(業務を)改善することに時間を費やすことが疎かになり、内部の意思決定のために議会で承認を得るための予算の確保にすごく時間を使っている気がする。事業の成果を問うことが大切である。

(寺澤委員) 今の評価システムを考えれば外部評価を行う必要はないと思う。最終的には議会に(事務事業評価の結果を)説明していかなければ、議論して終わりになってしまうのではないか。

(阿部副会長) 長野市では、財政課に予算要求をして最終的に各部局に予算を配分する形になっていると思うが、私たちには全く見えないので、わかりやすく見えるような形になると良い。

(宇賀田委員) 真野委員の説明の中に総括的評価と形成的評価とあったが、私はこれまで(外部評価は)形成的評価を行うつもりで、今後どう改善していけば良いのかということ各部局と話し合っていく会議だと思っていた。しかし、実際説明にくる職員は、(当該事業が)計

画的にできたかどうかをチェックされている（総括的評価）という思いであったのではない。評価の方法としては、形成的評価を行っていく方向の方が望ましいと思う。

（中谷委員）事務事業評価が政策全体のどの部分に当たるのか今後整理していきたい。

（山平委員）もっと行政の細部に目を向けて関わっていけるようにしたいと思った。

（小池委員）長野市行政改革推進審議会の中でも、市民への分かりやすさとかDXの推進という話があり素晴らしい（視点だ）と思うが、そこに乗っていくことのできない障害のある人や高齢者などへの配慮も考えた政策になると良いと思った。

（事務局）寺澤委員から予算査定や決算報告という意味で、予算執行をどう議会に説明していくかと同じ感じで、評価についても議会を含めた部分を明確にルール化していった方が良く、それは当然必要な部分ではないかというのが一点。もう一点は、真野委員から「自治体経営改革と行政評価」の説明があり、その中で長野市は第3象限の査定管理モデルのところに留まっている。最終的には、第1象限の市民協働型のところに行ければ良いという話だと感じた。この後、長野市としてこの辺をどういった形で評価に組み込むかということの研究していかなければいけないと思った。総合計画と行政改革は、ある意味表裏な部分であり、総合計画がプランであれば、行政評価はチェックに近いので、（委員が行う評価の対象は）今の事務事業レベルを上げたものになると思われる。第1象限に示されている市民協働型にニュー・パブリックガバナンス・モデルまで到達するのは相当難しい。委員の皆さんはどちらかという施策に対して何をすべきか、どこを直せば良いのかという方が、感覚的にわかりやすいと思う。その点を整理させていただき、また報告するような形が良いかと感じている。その部分について、真野委員からいただいた案等も踏まえた中で、方向としては施策的な部分を評価して、委員の意見を入れながら、職員がその気になって事業をやり直せるような仕組みづくりということが重要だと思う。

（普世会長）総合計画で描かれたあるべき姿と現状との対比という話がほとんどされていない。通常は、そのギャップを分析して、そこから問題点や課題を抽出し内部・外部の環境や職場の風土や成熟度を踏まえて方向を決めていく。あるべき姿と現状のギャップを分析していかないと良い方向に進まないのではないかと思う。

（真野委員）総括的評価のままか、形成的評価に取り組むのかということはずごく大事なポイントである。右肩上がりの時代というのは計画どおり5年間やり、後でチェックする総括的評価で良かった。しかし、先が見えない時代に入り、デザイン思考で試行錯誤してやっついこうとすると、形成的評価が必要になる。政策を実行しながら、その結果を吟味しながら、政策そのものを修正・変更していくということが大事になる。それが、形成的評価の導入による職員の意識改革そのもので、実際に自分のやっていることがどんな目的に繋がっている

のかということも意識しながら、実施している事業を自主的に評価しながら仕事を  
する職員が増えることに繋がるのである。

(事務局) 今職員は忙しがっていて、やることをやったという説明をすることに終始して  
いるような状況にあり、アウトプットを重視した仕事になっている。また、先ほどの評価の部  
分は報告として必要などころもあるので、(議会对応も含め) おろそかにならないように進め  
ていしながら、改めて審議会で議論いただく内容として案を作成していきたい。

4 その他

5 閉 会